

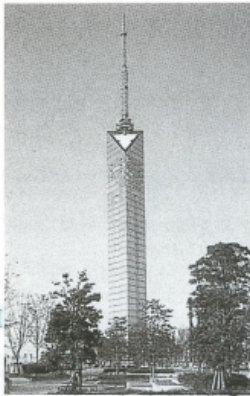
緑友会コミュニケーション誌

1994年5月発行 No.

84



博多祇園山笠



福岡タワー



第27回 全国印刷緑友会福岡セミナー

FRIENDS
フレンズ オブ グリーン
OF GREEN

 全国印刷緑友会

F U K U

第27回全国印刷緑友会 福岡セミナー

開催

1994年2月19日(土)
博多都ホテル

変化

するいよ・しなごいよ



2月19日(土)、第27回全国印刷緑友会、福岡セミナーが福岡市にある「博多都ホテル」にて開催され、全国各地より308名の緑友の仲間が集まった。



開講式は午後1時に始まり、福岡印刷若葉会、松尾善和君の開会宣言に続き、国歌斉唱・綱領唱和・来賓紹介と滞りなく進行された。そして各グループの紹介の後、福岡セミナー実行委員長・間直樹君が挨拶、引き続き緑友会会長・利根川利明君が「長いトンネルに入ったままの状態が続いている経済状況の中で、我々印刷関連業界が考えていかなければならないこと」「今回のセミナーに意欲的に参加し何かを身につけよう」と挨拶をした。

来賓挨拶では福岡県印刷工業組合理事長・久野桂一様より歓迎のお言葉と「第四次構造改善電子化と付加価値化について正しい知識を身につけてほしい」とのご挨拶をいただいた。

講演は午後1時40分から始まった。第一講は無敵の新日鉄釜石ラグビー部を選手として、そ

J O K A

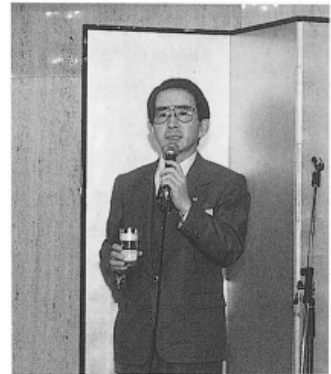
して指導者として築かれた、地元福岡市出身の森重隆氏が、「ラクビーを通して、団結力・チームワーク作りを実現してきた。『チームワークとは、本人同士が高いレベルで手を結ぶ事である。』『指導者の技量で、苦より楽(喜)を見い出せることができるか』等、様々な実話を基に約1時間半の講演を頂いた。

第2講は、日本初の本格的なテクニカルライティング会社でこの分野のリーダー的存在であるハイテクノロジー・コミュニケーションズ(株)・代表取締役社長の稲垣長利氏が「デジタル化」「電子デリバリー」「DTP」「マルチメディア」など、急加速していく印刷業界を含む情報関連業界の技術・クオリティーについて、「マニュアル制作の技術と留意点について、そして印刷業界という狭い視野でなく、情報関連産業の一角として認識し、危機感を持って新しい情報に耳を傾け対応できる様にしておくことが重要である」と述べられた。

講演が午後5時終了し、5時30分より別室にて記念撮影を行い、午後6時30分より懇親会が行われた。

緑友会16代会長古賀健一氏の乾杯の音頭で祝宴となり、活発な情報・意見交換がされた。

又、5月21日(土)に開催される第37回全国印刷緑友会仙台総会を主管する仙台刷親会と9月に開催される第37回全国印刷緑友会大阪大会を主管する大阪青年印刷人クラブが参加を呼び掛け、利根川会長より次回セミナーを主管する名古屋而立会にセミナー旗が伝達された。



森重隆

マーケティング概論

marketing

(株)森硝子店社長

講師 森重隆氏



ただいま御紹介にあづかりました森でございます。今日はテーマを「マーケティング」ということでしたが、何をしゃべっていいかわかりませんので、私がラグビーをやっておりましたことを、みなさんのお仕事には直接関係はないかと思いますが、これからお話ししたいと思います。

実は一昨日私は青森に行っておりまして、今日ざっと見ますと青森の方、岩手の方等全国からお集まりで、特にこの場を借りまして、東北の方に現役中は応援をしていただきましてありがとうございました。

私は出身地の福岡の小学校、中学校を出まして、高校は福岡高校というところで、現在この高校でラグビー部のコーチをやっております。そのきっかけは、OBの方達に「誰のおかげでこれだけ偉くなったんだ」といろいろいわれまして、どん底の高校を教えるようにいわれました。そんな風で3年前からやっております。

つい最近の話ですが、3年前に私がグランドに行きまして、グランドを眺めておりますと、子ども達は私の10年前の姿を全く知らないわけですが、見えますと、グランドをゆっくり走っておるわけです。たまたま先生が私の後輩ですので、その先生を呼んで、「あいつらゆっくり走っているけど、トップで走らせろ。」そう言いましたら、その先生が「やあ、あれがトップなんです。」と言いまして、あれがトップなら試合も出来ないのではないかと話しました。

「ちょっと待て、おまえがタイヤの上に座ってじっと腕組んで見ている様じゃ強くないよ。おまえがまず一番最初に動け。腕組んで見ているとは、ふざけるな。一緒になって走れ」と言いましたら、いやいや「はいわかりました」ということで、それから指導が始まりました。その彼らの夢は何かというと、大阪の花園ラグビー場へ行くこと。(笑)平気で言います。森さんがコーチで竹田さんがコーチだったら絶対行けると思います。恥ずかしい限りです。その年は3年生は3人しかいなかったものですから、次の年にかきました。それもいいゲームをやってくれました。

ラグビーでいいゲームといいますが、タックルが決まればいいゲームなのです。しまったゲームというのは12対11とか、13対12というようなゲームがおもしろい

わけです。そのゲームをやってくれたんです。次の年は新人選では負けたんですが、あれよあれよというまに勝ち続けまして、県大会の決勝までいきました。勝負と言うのは勝とうと思ってやらなければ勝てない。最初から勝つつもりで行け。その子供達はいいゲームをしてくれましたが、21対6で負けました。ぼくはその試合で感激しました。かあーと蘇ってくれるものがありました。昔の自分を思いだし、スポーツはいいなとおもいました。(笑)10年間感激や感動を忘れていたものを思い出させてくれました。

そして選手達に何がよかったかとそこで聞きました。そしたら、感激と感動を知りました。これは一生忘れません。その一言は、コーチ冥利につきます。その晩父兄から電話がありまして「いやーうちのむすこが3年間たいへんにお世話になりました。きょう帰ってまいりまして、この3年間のうちではじめて母親と楽しそうにしゃべった」そうです。(笑)「ラグビーをやっていたよかった」等といろいろしゃべって、「本当にうれしかったです。」というお礼の電話でした。

最近ぼくのところへ相談にお母さんたちがラグビーをさせたい。なぜラグビーなのか。雨の日も風の日も雪の日も一番根性がつくから、ラグビーをやりたい。いわゆる根性をつける手段としてラグビーをさせられるという人が多い。そうじゃないよ。スポーツというのは感動、感激がある。そこに目的を持っていかないと、日本のスポーツは段々歪んだ所へいってしまう。というような気がいたします。私の子供も中学にラグビー部がなかったものですから、サッカー部に入ると言いまして、ぼくはけっこううれしく思いました。それから5日後、子供が面白くないからやめたいといっています。面白いとか面白くないからとかで判断するものではない。一生懸命やっているうちに面白くなるんだよ。と話しをしてもわからない。やめたい。でもとにかくやれ。どんな練習をしているのか見に行きました。その練習を見ていたら、ぼくもこれじゃやめたいと思いました。それは、3年生と2年生が練習をしているわけです。そして1年生はまわりに座ってじっと見ているんです。そしてファイト!ファイト!と声を出しています。(笑)1時間ぐらいそれをずっと見ていて、それでは面白くないと思いました。要するに指導者が基本的に分かっていません。そんなことさせるよ

り、腕立て伏せ、腹筋、背筋やボール遊びの方がサッカーに役にたつのです。

これが日本のスポーツの全般の特徴なのです。声を出せばいいというものでは有りません。

福岡ダイエーホークスの根本監督にお会いしたとき、だいたいプロ野球が悪い。今のキャンプの時に2列に並んで1、2、1、2、と走っている。あんなものプロなら2時から練習だったら、自分でアップしてそこでダッシュ出来る状態にしておくのがプロではないのですか。これは、2年前の話ですが、まさしく森君の言っている通りだよ。と同感していただきました。日本のスポーツというものをもう少し考えなおさなくてはいけないと思います。たまたまおととい私は秋田におりまして、そこに、ミネソタ州立大学秋田校というのがありまして、その学長さんと日本のスポーツのあり方について話し合いました。それは極めておかしいところにおかしいと言うと、日本は教育から始まった。これがおかしい。体育これがいけない。体を育むこれがいけない。きをつけ。前へならへ。(笑)みなさんも私たちと同じ世代だと思いますが、気合いとか根性とか、がまんとか苦しいというところから入ったと思います。スポーツはきついんだ。きついのをがまんしてやるのがスポーツだ。ということから入ったと思います。ところが基本的には、スポーツは楽しいのだということをお教えするのが先だと思います。楽しいから苦しいこともがまんしなさい。というように教えるてはいけないのではないかと。そんな時代に来ているような気がします。それと同じ様に日本のスポーツはJリーグを見習わなければならないと思います。ラグビーをプロ化しなければという問題はここでは控えますが、Jリーグみたいに地域と密着したチーム作りをしていかなければならない。例えば青森にどこかのチームができる。地域に密着したチームを強くしていかなければだめじゃないか。Jリーグがよくやってくれたわけです。こういうよいお手本があるわけですから、そういう方向に向けて行かなければいけないと思います。ことラグビーのことに関しましてわたしがびっくりしますのは、彼らはどこで着替えるか。体育館の隅で着替える。試合が終わると寒いのに、水道で足を洗いニュージーランド、イングランドへ行きますと、どんなに小さな町にいってもクラブハウスがありますし、シャワー設備があります。こういう面が非常に遅れております。日本はスポーツを輸入してぱっと強くなりますが、バックグラウンドまではこないわけです。輸入できないわけです。そこに問題があります。1990年ワールドカップがイングランドで行なわれました。このメイン会場になりましたティックナムというロンドンから30分ぐらいのところ、8万人入るラグビーの専門場です。そこで私もゲームをやったことがあります。そこでは年間3試合か4試合しかやりません。どうしてか。伝統だからです。もうそれを聞いた時はごめんなさい。

国立競技場は伝統だからという言葉はないですね。

ごめんなさい。負けました。失礼しました。(笑)そういうところなのです。どうして伝統だから、グラウンドがいたむ、ということもあります。トッププレイヤーがやるのはそういう最高でなくてはならない。ウィンブルドンのテニスもそうですが、そういうふうなところでやるのが1つのステイタスだというようなことが、みんなが知っていて、しかもグラウンドキーパーまでも知っている。というようなところに英国のラグビーの強さがあるのではないかと思います。もっともっと日本のスポーツも考えていかなければならない。

野球、ラグビーについては根本的に考えなおさなくてはとんだことになると思います。我々が生きている間はいいかもかもしれませんが、次の世代で世界にたちうできないようなチームになってしまうのではないかと。思います。話しをもどしますが、私は大学は明治大学へ行きました。明治大学は北島先生とって今92才で監督をされています。ギネスブックにも載っているそうですけど、92才です。理論もなにもなく、ゴールラインに直角に走れと言います。それがゴールが一番近い。それはそうです。明治のラグビーは何か。前へ。その一言です。(笑)前へ。その一言が妙に重みがあります。その北島先生に育てていただきまして、4年間やりました。故障があって試合に出られない時に、新日鉄釜石から誘いがありまして、うれしかったのですが、それが盛岡から車で3時間かかり、冗談じゃないよというようなところ。(笑)しかしキザな言い方をすれば、青春の一時期をそんなところで生活するのめいかなと、思いました。北島先生はお前にびったりだとおっしゃいました。人生の先輩の方もこの中にいらっしやると思っていますので失礼かと思いますが、人生にはいくつかのチャンスがありまして、ほくがラグビーを選んだのもチャンス、釜石に行ったのもチャンスだったかもしれませんが、チャンスはなかなかつかめるものではありません。ほくは人生の前半でチャンスをつかめたのは本当に良かったと思います。

よく言われる言葉ですが、「スポーツの監督はやりたいやつにはやらしてはいけない。」おれには向いていない。しかし、みんながどうしてもやって下さいという人がリーダーになったら、一番いいです。自分でやりたいと思っている人が監督になると、この人が目だっでしまいます。だからそういう意味では皆からおされて、じゃあもう1年やろうと思ってやったわけです。とうとうその時に4連覇してしまうわけで、皆に喜んでもらって、お疲れ様もういいよ。しかもチームの世代交替になってきましたので、来年は負けるなど思っていたら勝ったんです。それから勝ち続け7連覇です。今年1年、今年1年と思ってやっているのが7連覇だった。ただ長期的なリクルートのことについては考えていなくてはならない。考えていないと釜石みたいになってしまいます。少なくとも4連覇5連覇する時まではリクルートの事は考えてました。ところが鉄鋼の不況で出来なくなった。これが釜石がガタツきた要素で

す。そういうリクルーティングをやっている神戸製鋼は強いと思います。

みなさんにラグビーのことを好きになっていただきたいので、これからラグビーのプレイについてお話をさせていただきます。ラグビーという競技はどのような競技かといいますと、簡単に言いますと、相手にボールをやらなければ勝つスポーツです。野球みたいに攻撃権は平等に与えられない。ボールをキープしていればよい。絶対に勝つ。そのボールを取るために頑張らなくてはいけないのがどこかといいますと、フォワードです。あのスクラムを組むやつです。ここは運動神経がなくても出来るポジションです。(笑) 特に1番2番3番は、特に第1列目というのは、80秒間のうちにボールを持つ人は1秒から5秒ぐらいです。あとの残り時間は何をやっているのかというと、がーんがーんとやっているだけです。(笑) ここがラグビーのすくいです。利根川会長はまさしくフォワードの顔をされていますね。(笑) 顔は大きい、体は大きい。向こうから平均800キロ、後ろから500キロ押しているわけです。自然に胸は短くなる、顔は大きくなる。そういう職業病です。(笑)ところが、こいつらが頑張らないとラグビーは勝てないのです。これが不思議です。いくら百メートル10秒代の選手を全部そろえても、このボールを持って走らないことにはトライに結びつきません。フォワードが頑張っても次の日の新聞に載るのはぼくらです。ボックスのことばかりです。FW一束で終わりです。フォワードがボールを出してくれてぼくらがトライに結びつける。これがオーソドックスなパターンです。フォワードがぼくらの所へきて森さんがトライしたボールはぼくが出したボールですよ。どうだったですか。よかった。よかった。彼らは、自分が出したボールを森さんがトライしてくれた。ぼくはあいつが出したボールをトライさせてもらった。これがラグビーの本当にいいところです。だからラグビーではガッツポーズが出ないのです。ゴールキッカーに渡して、何事もなかったようにします。今サッカーのパフォーマンス、あれはちょっとやめてほしいです。バレーボールで1点取ってぐるぐるまわるのもやめてほしいです。今時代にマッチしたパフォーマンスはゴールしても何もしないで帰ってくる。そんな選手がいないなあと思います。トライしたときに皆がよってこないのにはもう1つあります。そこまで行くのがきつからです。(笑)あと、ラグビーという競技はフォワードが頑張らなくてはいけない。あともう1つはどんなに下手でも、どんなに運動神経がなくてもある1つのプレイをやれば皆から信頼を得られる。男として認められるプレイというのがあります。それはタックルです。タックルさえしていれば、あいつは勇気がある、男として認める。タックルというのは皆の信頼を得るプレイだということを是非わかってほしいです。いろいろ話しましたが、マーケティング概論と、チームワークとかリーダーシップということも話さなくてはいけないのですが、なかなか私にはむつかしくて、

よく分かりません。わかっているのは、スポーツにおけるリーダーシップは人を動かすのは心ではないかということです。心がないといくらよいテクニックを持っていても人はついてこないと思います。チームワークなんていうのは簡単なもので、個人の能力がレベルアップしないとチーム力はレベルアップしないです。最後になりましたが、企業とスポーツはオーバーラップすることは少ないと思いますが、1つだけあるなと感じたのは、強いチームというのは元気がある。元気がないと強く成らない。

これが企業に必要ではないかと思います。



ハイテクノロジー・ コミュニケーションズ

high technology communication

ハイテクノロジー・コミュニケーションズ(株)

講師 稲垣長利氏



私が最初に話したいことは、印刷業界の周辺や中心の部分で色々な新しい技術が出て来たことにより、印刷業界が大きな影響を受けつつあるということです。それが、顕著に表れたアメリカで、どんなことが起っているかということ、印刷業界の外から見た変化を話します。

それはシーボルトレポートというレポートで詳しく述べられていることです。私は20年間、日本オリベッティというコンピュータ会社におりまして、印刷業界とは無縁でしたが、大府印刷という印刷会社に入りまして、現在、その子会社のハイテクノロジー・コミュニケーションズの責任者をしています。この会社について簡単に説明しますと、1983年に出来た会社で、ハイテクノロジーをユーザーにいかにか伝えるかということの内容としている会社です。具体的にいうとコンピュータ、OA機器のマニュアルをわかりやすく作るということが事業の目的でした。

分かりやすいマニュアルを作成するためには、文章力だけでなく、ユーザーが使用する場面を想像して、どういう順番で何を説明すればよいのかを構築する能力や、日本語の能力も必要であります。

日本の国語教育は、小学校一年生から大学までの16年間でも文学的表現の仕方ばかり教えます。アメリカの教育は高校生位から事実とか意見を延べる言語と、文学的表現の仕方にコースが分かれます。(中略)

分かりやすいマニュアルを作るということは、技術を理解して、それをユーザーが使う場面を想像して、その人達がどんな順番で何を知りたいかという分析ができて、そしてそれをその通りの順番できちんとした日本語で表現できる。以上のことができなければ我々の仕事は成り立ちません。

そんなところからスタートして、マニュアルを作るために原稿を作成し、本にしていくという過程を機械化していくためにDTPというものの研究も始め、マルチメディアという技術に変化していきました。

現実のアメリカでこういう技術が印刷業界にどのような影響を与えるようになったかと言いますと、現在ではモノクロの世界で定着しており、カラーの世界でもかなりレベルアップしています。このことにより、印刷業界のノウハウがDTPの出現により素人にも分かるようになりました。DTPが発注者側にセットさ

れることにより、アメリカでは版下業者が必要なくなり、一部出力センターとして生き残っています。

アクロバット、レプリカ、コモンランドということばをご存じでしょうか。これはどのメーカーの文章ファイル、テキストファイルでも画面上でみることができる、触れるというソフトです。

たとえば、九州の印刷会社で印刷されたものを東京で使用したい場合、印刷に必要なデータをすべてデジタル化して電送回線で送ることができれば、大量の情報を早く送ることができます。これが電子デリバリーというものです。電子デリバリーを更に進め、音や動きを取り入れようとするものがマルチメディアです。このことにより放送回線を利用して放送回線上で出版活動をするということも可能なわけです。そのおおもとはすべてのデータがデジタルになるということです。日本は、アメリカよりも情報インフラストラクチャーというものが大変遅れています。その最たるものがCATVで、アメリカの場合は65%の所帯に引かれています。日本ではわずかに5%にすぎません。CATVが各家庭に引かれていけば、光ファイバーを幹線に引いてしまえば、全家庭と結ばれるわけです。そうすると、世の中の買い物パターンというものが全く変わってしまいますし、逆にオンリーマウンビデオという形で、必要時にリクエストすればCATVの回線網を使って見たいビデオを電送してくれるわけです。

アメリカでは副大統領が2015年までに情報ハイウェイ構想ということを楽しみに言っていますが、日本も2005年~2010年までに同じ様なことをしようということで、いくつかのプロジェクトが動いています。

(中略)

技術の変化というものは、我々が考えている以上にスピーディに突然やってきます。それに我々は、おびえるのではなくきちんと受け止めて、どうすればよいかが分かっているならば、ゆうゆうとしていられます。そのへんのことを色々な角度からお話したいと思います。

激変の時代と言われていますが、2年位前までは、そんなに大きな変化はありませんでした。それは東西の冷戦構造は全く変わっていなかったし、日本の経済も上がり調子でした。

自民党がつぶれたことと、ソ連の崩壊というのは実

は同じことで、力と権力があればすべてが動くと思っていた人達が、そうではないかもしれないという時代になってきたと思います。5年位前に、簡単な原稿を依頼されて、将棋さしの経営と碁打ちの経営ということで書きました。碁石に個性はありません。それに対して将棋というのは全部個性があります。

碁石は相手を軽い気持ちで殺しても、寝返ったりはしませんが、将棋の駒というものは、へたに殺すと相手に寝返ってしまい、攻撃をしかけてきます。碁石の経営というのは、ワンマン経営で経営者が全ての指揮をしてゲームを進めていきます。打ち手の能力が低ければその会社は倒産してしまいます。しかし、将棋さしというものは、駒の個性を認めて、使い所を誤るともったいないということも出てきます。私は、このことと、東西関係の変化、ソ連の崩壊、自民党の条約ということとはなんとなく関係があるような気がします。つまり、将棋さしの経営に近い経営が現代的な経営ではないかと思えます。今までのように、力とか権威によってみんなを引っ張っていく経営というのは、経済がだまって成長しているときにはそのほうが効率がいいわけです。

それでみなさんに話したかったポイントは、会社の中でどのように会議をしておられるかということです。(中略)

まず、私どもの会社で会議を行なう場合にはいくつかのルールがあります。第一に社長である私が絶対に議長をやらないということです。最終決定者である私が議事の進行を云々するのはよくないと思ったからです。第二に会議の目的を明確にすることです。一週間位前に会議の内容をメモして渡し、充分な準備期間を設けるということです。会議に参加するメンバーはその議題に添って、必要な人を集めることも大切です。第三に、議長がどういう采配をふるうのかということが重要な問題となってきます。議長の大きな役目というものは、発言者の抽象的な意見を、言いたいこととそうでないことを整理、確認するということです。議長は公平な立場の人がやらなければ意味がありません。私共の会社では持ち回りで議長と書記の経験をしてもらっています。書記の経験の必要性は、書記という役割は人の意見をきちんと把握しなければ書けません。第四に、意見というものは人それぞれ違ってあたりまえだということです。意見が違うから議論をするわけで、会議が成り立つわけです。私は、役職というものは偉いということではなく、社長であっても営業員であってもただ単に役割分担でその役目をしているだけだと思います。しかし、今の日本の伝統的な企業では社長が偉いと思われていますから本当の意見がなかなか言えないわけです。ですから会議の方法を変えていくことが若い人達のパワーを上手に経営の戦略に生かしていく方法だと思えます。

四年前、私の卒業した学習院大学で国際委員会の委員というものになりました。会議に出たところ、ほとんどが大正生まれの大先輩ばかりでした。そこで私は

自己紹介のときに、「私は、社長をしていますので月に1回、2時間といっても貴重な時間をさいて来るわけですから、来た以上は自分の意見ははっきりと言わせて貰います。それが気にいらない方はいますぐ言ってもらえれば私はこの場から消えます」と申したところ自由に意見を述べてもいいというお墨付きを貰いました。

(中略)

私の考える国際化というのは、人を差別しないことです。人を差別しない学生を育てることが本当の国際化であると定義するのに6ヶ月かかりました。そして、そのためにはどういふ手段があるかという話をようやく始めました。そのうちに会議を仕切るようになりしました。そんな経験から、言葉の定義というものも会議に必要なということをおアドバイスします。

次に、こういう時代ですから色々な意味で危機感を感じている経営者もおられると思えますし、安心して居られる方もおられます。

(中略)

要は、自分達が守ってきたマーケットが、新しい技術によって浸食されはじめた時に、どこで気付けて自分の転身を固めるかということです。経営者としてある程度の情報について常に見ておく必要があります。先程申し上げましたシーボルトレポートを知らない方は黄色信号ではないかと思えます。やはり、最先端の情報を早く手に入れて、業界にどんな影響を与えるのかということの人よりも先に知れば、手を打つチャンスがあるわけです。一つの情報をただ見るのではなく、それを経営にてどう生かすかという発想で読んでいただきたいと思えます。

会議の方法を変えれば、経営の在り方も変わってくると思えます。従業員と経営者が一体となって経営を考えるという習慣が生まれてくれば、物事の本質を見ることがだんだん出来るようになります。それでは印刷業の本質とは何でしょう。情報流通業です。プレスにこだわらなくてもいいわけです。画面で読むという方法もあるわけですから、電子的に送る方法をうまく使えば放送でもいいわけです。

物事の本質ということの時々、会社の会議で取り上げるといいのではないのでしょうか。

考え方のテクニックとして形に注目した場合に何に使えるか、重さに着目して、重さを利用したアイデアを考えてみる。金属という本質にも着目してみる。そうするとアイデアがかなり整理されて出てきます。時には、非日常的なことを皆で考えてみるというような会議も大変役に立ちます。よく出来るビジネスマンというのは現状否定ができる人です。楽をしたいと思う人ほど工夫ができます。

世の中の不安に怯えるのではなく、不安について正体を確かめ、自信をつけることです。それが経営者としての務めだと思えます。

第27回全国印刷緑友会 福岡セミナーを開催して

福岡印刷若葉会
実行委員長 間 直樹

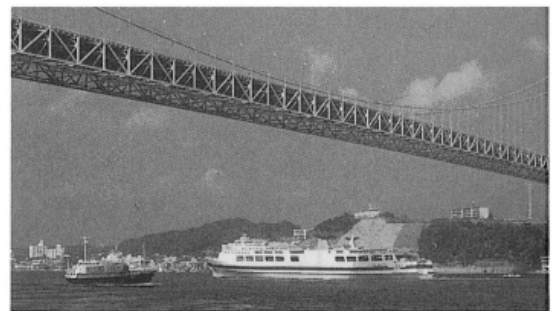


1994年2月19日(土)、第27回全国印刷緑友会福岡セミナーを、博多都ホテルにおいて全国及び地元から308名の皆様の出席を頂いて開催させて頂きました。本当に多数ご出席を頂きまして有り難うございました。当初の予定を200名と設定していたこともあり、また、登録がなかなか把握できず、人数確定がぎりぎりまで遅れた事もあり、準備面で行き届かない面が多々あったことを心よりお詫び申し上げます。

セミナーは「変化することしないこと」の視点から技術の変化とか経営の本質とかこのセミナーを通して何か掴むものがあるかと思ひ企画しました。内容は「森重隆のマーケティング概論」と題して森重隆氏、「ハイテクノロジーコミュニケーションズ」と題して稲垣長利氏。森氏からは15年間のラグビーでの成功体験に基づいて目標、勇気、元気の大切さ、心の触れ合い等について時間の経過を感じさせないほど楽しくお話し頂きました。又、稲垣氏からは対照的に合理的にコミュニケーションに関してのお話

しを頂きました。森氏はこの講演を通してかなりのファンを作ったと思いますが、まさにコミュニケーションを通してマーケティングを実践して見せてくれたように思います。そして、コミュニケーションの本質は「変化しないこと」だと思ったのです。稲垣氏はアメリカでいま変化しているメディアに関する情報を紹介しながら、変化に不安になるより変化を知ってビジネスチャンスにしてやろうという姿勢が必要だと言うことを話して頂きました。

懇親会も盛り上がりました。当初の計画ではかなりの緊縮財政で進めていたのですが、300名の参加があると言うことで、急遽、内容をグレードアップしたものですから予算の詰めが悪くて若干の赤字になってしまいました。参加者の皆さんに喜んで頂けた事を思えば、若干の赤字も仕方がないと若葉会会員一同容認しております。参加して頂いた緑友の皆様と寛容な若葉会のメンバーに心より感謝して実行委員長の役割を終えます。有り難うございました。



セミナーに参加して

SEMINAR

継続は力なり

長崎青年印刷人会
毎熊一太

先日、2月19日(土)、福岡博多都ホテルに於いて第27回全国印刷緑友会福岡セミナーが全国より308名という多くの人が集まり開催された。

講師に元新日鉄釜石ラグビー部の森重隆さん(現在(株)森硝子店社長)とハイテクノロジーコミュニケーションズ(株)社長の稲垣長利さんでありました。

講義の内容として森さんにおいては、ラグビーに関してチームのリーダーシップ・チームワーク・そして一人一人の努力の重要性をスポーツだけには限らず「会社」というものに共通性を強く感じる講義でした。

稲垣さんに於いては、この業界の現状、今後の展開、そして社内会議の本当の在り方。今現在の状況を否定的に見つめていく事の重要性を

拝聴することが出来た。

“けいぞくに力なり”会社に於いても今の現況を続けるのは努力が必要である。まして、今以上成績を上げるのにはそれ以上の努力がなければ成り立たないのは確かである。

今回、全国の方々と交流・情報交換をして今後の会社の在り方や大切さを考えさせられたセミナーであった。



強いチームには 元気がある

仙台刷親会
菅田武雄

東北は米の凶作に加え、売上げも伸びず先行き不透明とあって不安感も募っていた折に緑友会福岡セミナーの誘いを受けた。

積極的な活動を続けている緑友のメンバーが全国から集まると聞いて、不勉強の私に理解できるのか？博多は遠いなあとも思ったが、見て、感じるだけでもと参加してみた。

受けでもらったプログラムには予想通り難しそうなタイトルが並んでいる。指定された席も一番前、緊張していたが、森講師の第一声、出だしからこげた。講師自らタイトルに詐りありと言う。あとは笑い放しである。

笑いつつ書いたメモを見ると。

- チャンスはファ〜とやってくる。
- リーダーは回りの人が決めるもの、やりたい奴はリーダーに向かない。
- リーダーは負けたくやしさをチームに植えつける人がよい。
- タックルするには勇気が要る。しかし、タックルする奴は回りの信頼を得る。
- 強いチームには元気がある。

etc……話された内容は看板通り「マーケット概論」であり、体験から来る強さに満ちた楽しい時間であった。

第2講で書いたメモは多すぎてうまくまとめられない、ここではカットさせて下さい。

今回、初参加の緑友セミナーでしたが、全体の熱気、若葉会の心づかい、さすが緑友と感激、大満足の博多でした。





利根川会長

グループ訪問記

長崎は今日も晴天です！

例会訪問・12月4日

長崎青年印刷人の会
松浦正欣

——結論を先に申しませう。

「長崎は、ほんなこて、

良かところですよ!!

特に夜の長崎は、小林君と松本君に
ガイドをお願いするのが一番。」

さて、去る昨年12月のある日、利根川会長と米倉君と私の3人は、長崎青年印刷人の会の忘年会例会に出席。佐世保若汐会の参加者を加えて約40人の会員の皆さんに、全国緑友会について話しをしました。会員の皆さん、とっても熱心に聞いておられましたので、これからの緑友の会合にはたくさん参加してくれるものと思います。

例会と忘年会は何ごともなくスムーズに終了、さて、これからがホントの本番、前出の小林君と松本君の案内する長崎の夜の街は、この不況を吹き飛ばす勢い。長崎の夜には不況の言葉は見当らない、いやいや楽しい夜でしたが……。

私達3人には、ちょっと不満が残りました。それは、一番楽しんだのは、案内役のはずの小林君と松本君、私達3人は横目でジーと見てるだけ。

『接待している事を忘れちゃいかんよ——。』



大雪の札幌雪まつり前夜の

例会訪問・2月4日

札幌青年印刷人の会

伊藤文二

2月4日(金)札幌雪まつり前夜祭の日、利根川会長を迎えて例会が持たれました。その日は地元の私たちも驚くほどの大雪で、千歳空港から、今ではJRで40分で着くところを2時間もかかって来られたりして、会長には大変お気の毒をかけたことと思います。

しかし、そんな悪天候の中でも一日の仕事をこなすほぼ定刻に顔を揃えた我がメンバーの様子を見て、雪国の人間のたくましさを再認識されたことでしょう。又、台風銀座の地方の方たちは、通過中の嵐の中では減多に出歩かないと伺っておりますが、不夜城「すすきの」はその夜も大勢の人が出て、これにもびっくりされた事でしょう。冬眠しているはずの熊までものこのこ歩いておりました。(いや、それは私のことです)

皆さん、北海道を理解するには是非冬におでかけ下さい。スキー・スケートはもちろん、雪かき・上手な雪道での歩き方・凍結路面での安全な運転方法等、北国ならではの生活の知恵をお教えいたします。

思い出…

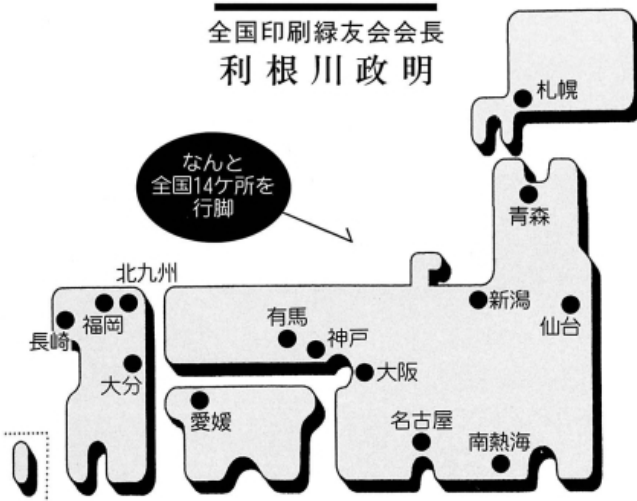




会長、この一年の思い出

『早や一年』

全国印刷緑友会会長
利根川政明



昨年の5月に開催されました第36回大分総会で、第20代会長に就任させて頂いてから早いもので間もなく一年になります。

安藤博（ぎふ印刷翠陽クラブ）広報委員長より一年間の感想を書けと命じられてペンを執らせて頂きました。

青森大会

ラッセーラ、ラッセーラの掛け声に“ねぶた祭り”での青森大会は、緑友に永遠の思い出を作って頂き、青森県印刷青年経営者会議の皆様の友情に参加した全員が、熱く感動を憶えたこととおもいます。講演を頂いた“伊奈カッペさん”よりすぐさま講演内容が緑友の皆様に少しでもお役に立ちましたかとお手紙には、伊奈カッペさんのお人柄が滲み出ており頭が下がる思いでした。

福岡セミナー

また、福岡セミナーで楽しく時間を忘れさせて講演を頂いたラグビーの将 森重隆氏より頂いたお手紙に、福岡に戻って三年目でお嬢様を失ったとことが述べられていました。息子さんのことを多くお話していたのですが、その陰にはきっと亡くなられたお嬢様への思いが込められていたことと思い、今更ながら森重隆氏のお人柄に感激しております。

愛媛印刷人青年会創立20周年

愛媛印刷人青年会の創立20周年は、地域密着、地元商店街とのタイアップ、印刷のPRと素晴らしいイベントを見せて頂き、北九州Yクラブ主管の第11回九州山口青年印刷人大会では九州山口の団結を感じ、仙台刷親会主管の第35回東北青年印刷人連絡協議会では、東北地区の青年印刷人の皆様と親しく語り合いができ、大分印刷若梅会恒例の大分青年印刷人大会も回を増すごとに充実し、札幌青年印刷人の例会訪問では貴重な大雪の経験、新潟県印刷新世会の総会では事業推進、第29回を迎える大阪青年印刷人クラブのトップ印刷人セミナーでは継続の力を感じ、長崎青年印刷人会では佐世保印刷若汐会のメンバーも駆けつけて頂き、名古屋而立会、神奈川正和会は熱心な研修と、全国のグループが本当に頑張っていると痛感しました。



よく会長は全国を回って大変ですねといわれます…!!

確かに楽ではないですが、各グループを訪問させて頂き皆様と語り合い、杯を交わしていると人と人との素晴らしい出会いが多くあります。まだ緑友会のイベントに一度も出席したことのない若いメンバーから“会長、次のセミナーには必ず出席します!! 緑友会のこと少し判ってきましたよ!!” そんな声を聞いた時遠くまで来てよかったと嬉しく、疲れがふっ飛んでしまいます。

次年度も出来る限りグループ訪問を続けて行きます。どうぞ声をかけてください!!

こんにちは

Be Ambitious, Mr. Green!!

全国の緑友会の皆様、こんにちは。大阪青年印刷人クラブです。昭和37年に発足された当クラブの目的および事業は、「青年印刷人こそ印刷業界発展の原動力であるという自覚に基づき、業界の社会的地位の向上と経営・技術両面の近代化に必要な事業（研究会、講演会、共同調査、社会奉仕、その他）を行う」です。

大阪と緑友会との関りは、諸先輩たちが第9回総会、第16・18・21回セミナーを主管させて頂き、昭和52年から2年間を我らの作道亮雄氏が緑友会会長を務めさせて頂きました。

また、平成4年に全国の緑友会の皆様のご協力を頂き、ホテルニューオオタニ大阪で「創立30周年記念式典」を開催し、歴代会長やOBら新旧メンバーが一堂に顔を揃え、大阪の印刷業界の歴史とともに、歩んできた「大阪青年印刷人クラブ」の伝統を祝いました。

現在会員数は62名、有馬グランドホテルでの

「トップ印刷人セミナー」をメインに毎月の例会（勉強会・家族会など）を開き、自己研鑽と親睦を中心に活動を行っています。

さて、10月15・16日に大阪青年印刷人クラブの主管で「第37回全国緑友会全国大会」を三井アーバンホテル大阪ベイタワーで開催します。

毎日放送のラジオ番組「イブニングレーダー」などで活躍中の諸口あきら氏を講師に招き、ミニシアター・似顔絵コーナーをはじめとするアトラクションを楽しみ、大阪の秋を満喫して頂こうと考えております。ご多忙とは思いますが、全国緑友会の皆様の多数のご参加をお待ちしております。

今後は、良き諸先輩やOBの方々、メンバーの英知を結集し、より充実したクラブを実現するべく努力を重ねていきますので、今後とも我々「大阪青年印刷人クラブ」にご指導、ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

予告

第37回全国印刷緑友会 大阪大会

1994・10・15日(土)・16日(日)

三井アーバンホテル 大阪ベイタワー

主催/全国印刷緑友会 主管/大阪青年印刷人クラブ



全国印刷緑友会

FRIENDS OF GREEN

FRIENDS OF GREEN No.84

〒113 東京都文京区湯島2-4-4
TEL.03(3811)1111(代)

発行人 利根川 政明(文京緑友会)
編集人 ぎふ印刷翠陽クラブ
